

方法論も運動論も持たない集団にあって、自己の、そして集団のこれまでの動きを、冷たくとぎすまされた視線でとらえ、位置づける作業は重要な意味をもつものである。あたかも、すべてが「政治」によって動かされているかのごとき感を与え、いわゆる「政治闘争」の盛り上った一九六〇年代後半から一九七〇年代初頭にかけて、「交流（むすび）の家」建設運動に「交流の家」完成という形で一つのくぎりのついたF I W C関西委員会の活動は、その存立基盤を一層問われると同時に、一層その意味が明らかになってきている。そういった位置づけにおいて、一九六九年前後に書かれた原稿のこの「シャベル第三号」は、今日の問題に深いさぐりを入れる一つの視点を示すものとなるであろう。

関

「しゃべる」復刊第3号

原稿募集のお知らせ

波瀾に満ちた1969年が終り、歴史の区画点となるべく70年を迎えようとしています、もろもろの運動が、思想が一つのサイクルを廻り終えたのは、60年からこの69年であったような感があります。そのような状況の中で、労働キャンプ運動もそれと共に変わりつつあることは否定できないと思います。

交流(むすび)の家が、60年代前半から始まり後半へかけて受け継がれてきたことは、偶然性だけでは片づけられない問題を多く含んでいることでしょう。60年を契機にして、労働キャンプ運動は60年代の思想を先取りし、それは、「ワークキャンプ」によって発酵しつづけ、実体化したものとして「交流の家」を見るのは我田引水でしょうか。私たちがさまざまな運動に対して拮抗し得る唯一の集団論は、「ベ平連」から「全共斗」といった形で、60年代後半に大きく日本を揺るがす方向で現われてきたであろうし、交流の家の思想は、同じく学園占拠という形で全国的に生み出されたとはいえ、それらのものに対してなおも、労働キャンプという運動形態に固執し得る私達の思想的根拠は何なのか、ということが現在私達に問われているのではないのでしょうか。

彼らが角材を握っていた時、私達はシャベルを持っていたということは、案外「理屈なんかあらへん、ただおもろいからや」という実感的なものかも知れませんが、つい先日まで、キャンプキャンプと云って状況運動と労働キャンプ運動の位置づけなど考えもしなかった連中が、今日のような政治的季節になると急に「アンボ、アンボ」と云いだして、キャンプ集団の意味を問うことなしに、出かけていこうとする事柄は、やはり、いま考えなおしてみなければならぬ大切なことのように思われます。

新しく起ってきた運動に対して、なおも対置できるキャンプの思想とは何か、という問いは、この60年代の私たちの運動の底流を再度検討深化することなしに生まれてこないだろうし、その作業によって70年代の労働キャンプの方法と方向が探れるのではないのでしょうか。

このような視点から、労働キャンプという運動形態の方法論を考えなおす必要を、私達は感じ、前回の「しゃべる」から6年の後の現在、「しゃべる」復刊第3号の刊行を呼びかけたいと思います。

1969年12月10日

関 隆 晴・矢 部 顕